



245号

2019/7

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



目抜き通りの仲良し：中国では全土で北京時間を標準時としている。従って西部の地方は日没までが長い。ここは四川省西部の街丹巴。夕方5時過ぎは、まだ昼の感覚だ。仲良し二人組はどこへ繰り出すのか。当然夜明けは遅いので、寝坊が増えないか心配だ。
(四川省丹巴 2018年7月 佐々木健之撮影)

'わんりい' 2019年7月号の目次は20ページにあります

路不拾遺

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から 文と訳・有為楠 君代

ういくす

今日は、道德のお話です。

・>・>・>・>・>・

昔、孔子が魯の国で役人をしていましたが、当時の社会のモラルはとても良いものでした。

ある日の夜、ある人が道端に玉が落ちているのを見つけました。彼は、この玉を落とした人はきっと探しに来ると思い、一晚玉の傍で見守りました。

次の日、果たして玉を探しに来た人があり、その人は、玉の傍で、自分の代わりに玉を守っていた人がいたのを知って、とても感激しました。

玉を守った人の話はすぐ人々の間に広がりました。

一般の人々は孔子の「道に物が落ちていても、拾って自分のものにしない」と言う考え方に影響されて、社会秩序は良くなり、誰も落ちているものを拾って自分のものにしなくなったので、貴重なものを失くしても、探せば必ず戻って来ました。

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：遺＝遺失物。道端に他の人が落としたものがあったとしても、他の人は誰もそれを拾って自分のものにしない。社会の気風がとても良いことの喩え。

使い方：「路傍の落とし物を拾わない、夜戸締りの必要がない」と言う世の中は、人々が憧れる社会だ。

・>・>・>・>・>・

本の中では上記のように、孔子の感化でこのような社会が出現したと教えていますが、これは理想ですね。確かに孔子の目指す世の中はこのようなもので、彼が政治家として長い間活躍すれば、このような世の中が実現したかもしれませんが、孔子が魯の国で政治にかかわったのは5年程で、民を“路不拾遺”の境地に導くには短過ぎたようです。

実際、この言葉は史記の列伝「商鞅」のくだりに（「商君列伝」）に出て来ます。商鞅は秦の孝公に仕

えた政治家で、変法と呼ばれる制度改革を断行し、秦の国力伸張の基を築きましたが、その根本は法家の考え方で、法を厳しく適用しました。人々が道に落ちているものを拾って自分のものにしなかったのは、法の執行を恐れたためでした。

しかし、原因はどうかで、表面的には孔子が理想とするような現象が現れたのですから、孔子の教えの結果を予想したり、強調したりする時にも使われるようになった言葉のようです。

ところで、私はこの言葉とはまるで反対のような出来事に遭遇したことがあります。もう 12, 3 年前

になりますが友人に誘われて、春節の田舎情緒を味わう旅に出かけました。春節の朝、付近の部落ごとに練り出すパレードを見学するのに、ガイドさんの尽力で村のお偉方が居並ぶ観閲台の片隅に、我々一行の席も用意していただき、開始時間に合わせて出かけました。例によって長い間待たされたので、トイレには皆で一度に行くことになり、女性陣 4, 5 人が連れ立って席を



挿絵 満柏氏

離れました。

トイレは春節で閉まっている役所の中であって、15 分近く時間を費やし席に戻ってみると、私達の席に村の人達が座っていました。村人は私達を見ると直ぐどいてくれたので無事元の席に座ることが出来ました。

この時、すぐ戻る積りだったので、眼鏡を机の上に置いたままにして席を立ちましたが、戻った時、メガネはありませんでした。すぐに気が付き言えれば出てきたかもしれませんが、その時は気付かず、そのままになってしまいました。忘れ物と思ったかもしれませんが、戻って来た時、席と一緒に眼鏡も戻しておいてくれればよかったのと思いました。

今はもうこんなことは起こらないでしょうが、中国の残念な思い出の一つです。

Yǒu chǐ qiě gé
有耻且格
はしあ か たた
恥有りて且つ格し

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄



「日本文化は恥の文化である」と評した人物がいます。その人の名はルース・ベネディクト。アメリカの文化人類学者です。その著書の名は『菊と刀』。第二次大戦後、これが日本で翻訳され、一大旋風を巻き起こしました。

彼女の言う「恥」の文化とは、世間体や人目を気にする文化のことで、今風に言えば空気を読む文化。裏を返せば「罪の意識を伴わない」薄っぺらな文化ということです。「身内の恥をさらすな」「旅の恥はかき捨て」などという言葉にそれは代表されます。バレさえしなければ何をやってもいいのか、そう言われてみると日本人として思い当たるふしが無くもありません。良い意味で、戦後の日本人が自分たちの文化を見直す契機となったのは事実です。しかし一方、日本人の持つ「恥」の意識は、必ずしも否定すべきものとは限りません。キリスト教やイスラム教のように強力な宗教基盤を持たない日本人社会では、お互いを戒め合い、労り合い、社会生活を円滑に行うための手段として必要不可欠の、しかも独自の優位性を持った道德規範であったとも言えます。

なお、この著作は対日軍事目的の研究をもとにまとめられたものなので、作者個人の真意がどこにあったかはよくわかりません。しかも彼女は戦後まもなく世を去っているので、その後の研究の進展について想像することもできません。ただ一つ言えることは、「恥」の意識の根源には触れていないということです。

ではその根源はどこにあるのか。話は少し飛びますが『論語』に孔子の言葉として次のような一節が見えます。「道之以政，齊之以刑，民免而无耻(Dào zhī yǐ zhèng, qí zhī yǐ xíng, mǐn miǎn ér wú chǐ)」
これ みちび まつりごと これ ととの けい
(之を道くに 政 を以てし、之を齊うるに刑を以て

すれば、民免れて恥なし) (為政第二)。政治の力で人々を誘導し、刑罰によって社会の安定を維持しようとするれば結果はどうなるか。人々は刑罰から逃れさえすればそれでよしと考え、犯した罪を恥じることもないだろう。「道」とは誘導すること、「政」とは政治のこと、「齊」とは安定を維持すること、「刑」とは刑罰のことです。つまり「恥」の心は政治権力や刑罰などの強制によって作られるものではない、ということです。

孔子はさらに続けます。「道之以徳，齊之以礼，有耻且格(Dào zhī yǐ dé, qí zhī yǐ lǐ, yǒu chǐ qiě gé)」
これ みちび とく これ ととの れい
(之を道くに徳を以てし、之を齊うるに礼を以てすれば、恥有りて且つ格し)。道德心でもって人を導き、礼の規範でもって秩序を保つならば、人々は己の罪を恥じて正しい方向に進むだろう、と。ここでいう「徳」とは道德心、モラルのことです。「礼」とは道德心が形となって現れたもの、つまりマナーのことです。モラルとマナーは権力からの強制によって与えられるものではありません。長期にわたる教育と習慣によって徐々に培われていくものだと、孔子は常日頃から主張していました。それを可能にしてくれる本源が「恥」の心です。孔子のこの思いは、江戸時代『論語』の普及と共に、さまざまな曲折を経ながら武士道精神として徐々に日本人の心に定着していったのです。

しかし「恥」の心も武士道精神も、時が経てば錆びつくものです。宗教だって同じことが言えます。『論語』は「恥」の心を教えてくれると同時に、そこに錆があれば、それを削ぎ落す役目を果たしてくれる「砥石」のようなものではないでしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

お爺さん三人の大連の旅(5)

寺西俊英

8月15日(2018年)、棒極島を後にして我々は中山広場の近くにある旧満鉄(南満州鉄道株式会社)の本社に向かった。小雨はずっと降ったり止んだりしている。途中「人民路」という、5つ星ホテル、デパートや銀行などが立ち並んでいる大通りを通った。東京では銀座通りに相当すると言えようか。その中にシャングリラホテル(香格里拉大飯店)があるが、大連では有名で建築後かなり経っているが格式は高い。このホテルの敷地内にシャングリラ公寓というマンション棟が立っている。私の大連での勤務時にこの公寓の21階にある一室を社宅として使用していた。私の部屋は前任者から引き継いだが、家族用なのであろう、140平米もあり単身赴任であったので随分気が引けた。久しぶりに外観を間近で見たが当時のままで安心した。

ホテルの中までは入らずすぐ出発した。5分くらいで目的地に到着した。今回は李さんが建物内の見学の予約をしてくれており中に入ることが出来た。何から何まで気を使ってくれ本当にありがたい。ここは何度も見ているが中に入るのは初めてである。この建物は外観を見るもので中に入れると思っていなかったためだ。中に入る前に二人に見せたいものがあった。建物に面した歩道にはマンホールが2~3個あるが、満鉄のMを図案化したマンホールが設置されておりそれを見てもらおうとしたのである。以前は日本からのお客さんや友人にマンホールを見せ、写真に納めたりしたのだ。ところが無いのである。何の変哲もない鉄製の蓋になっている。少々がっかりしながら入口で50元を支払って入った。チケットには、「満鉄旧址陳列館」と印刷されている。係りの女性がずっと館内を案内してくれて、都度李さんが我々に内容を伝えてくれる。内部は当時のままであり、この廊下を後藤新平総裁が歩いていたのだと思うと感慨深い。総裁室も当時のまま保存されており、執務した机やら調度品が置かれているがやはり歴史を感じさせる。なにしろ満鉄ができたのは今から113年前の1906年(明治39年)であり、後藤新平が初代総裁である。彼は1906年11月



現在は旧満鉄本社内に展示してある満鉄マーク入りのマンホール

から1908年7月までの2年弱就任している。ちなみに1945年の敗戦までの39年間に17人の総裁が就任している。

総裁室の隣の広い部屋に入るとそこには写真やら遺品などずらりと並んでいた。当時の満鉄経営の幅広さが伺える。陳列ケースを順に見て行くと、何とそこに歩道にあったマンホールが何個か置かれていた。やはり当時を知る貴重な歴史遺産と今ではなかったということであろう。別の部屋に販売コーナーがあり、Tさんは満鉄のマークが入った懐中時計を求めた。

ホテルに戻り4人で話をしているうちに台風の影響で風雨が強まって来た。そして6基あるエレベーターが半分動かなくなるというアクシデントが発生した。雨が小止みになった頃、李さんは、明朝空港まで送るから今日は帰ります、と言ってハイヤーで帰られた。夕飯の相談をしていると、もう一人の李さんから連絡が入り今ホテルのロビーに来ているという。3人にお土産を持ってきたというのである。下に急いで下りると紙包みを3個持った李さんが立っていた。明日は朝早く空港に行かれるので今日持ってきたという。見ると有名な鳳梨酥(パイナップルケーキ)と白酒が入っていた。李さんはお店があ

るので、と言ってすぐ帰られた。夕食は雨模様なのでホテルの向かいのレストランで食べ、帰りに近くの果物屋でイチジクを買った。

お二人は今日（8月16日）が最終日である。朝9時15分発のCA951便なので6時半にロビーに集合した。李さんはすでに来ており、チェックインの時払った押金（保証金）などの精算をしてくれた。それからホテル前のタクシーに4人で乗り空港に向かった。7時過ぎに空港の国際線ターミナルに着く。私はあと3日滞在するので、入場口でお別れだ。二人とも大連は初めてなので事前に入場口から先の行き先を簡単な図面に書いたものを渡してある。まずCAのカウンターで航空券を発券してもらい、次に出国カードのある場所に行って書き込む。それから税関・手荷物検査という具合に、図示したのを渡したので安心して李さんと二人で手を振って送り出した。

今回の旅行記はここで終わりのはずであった。ここからが「事実は小説より奇なり」で予想外の展開があった。

8月19日の同じ便で帰国した私は、その日自宅に着いた後、二人に無事を確認するため電話した。するとTさんが言われるには無事には着いたのであるが、大連空港で神様のご加護があったというのだ。入場口からまずCAのカウンターで航空券を発券したまでは良かったのであるが、そのあと出国カードがなかなか見当たらず相当うろうろしたらしい。その時ちょうどそこに居合わせたのがNさんという中国人の女性である。彼女は8月に実母を亡くし実家の遼陽（遼寧省・瀋陽の近く）に帰っており、葬儀も終わったので大連空港から千葉市の自宅に向かうところであった。なにか二人の日本人のお爺さんが困っている様子であったので見るに見兼ねて声をかけてくれたのだ。勿論日本語で。私は、出国カードは受付カウンターと反対側の台にある、と書いたのであるが台の上に無く分かりにくい所であったらしい。すぐNさんが置いてある場所を教えて書き方も確認してくれたのだ。「地獄に仏」は、少々オーバーだが、一緒に税関も通過し手荷物も受け取って広いコンコースに出た。それから搭乗時間までだいぶ時間が有るのでお礼に喫茶店で朝食をご馳走しながら三人で話をし、電話番号を交換したという。

その後Tさんとは時折メールしていたようである

が、Nさんは最愛の母を亡くし、ずいぶん落ち込んでいたらしい。そこでTさんは、「“わんりい”という私が入っている会に入会したら如何？ 中国人も多いし、色々な活動をしているので気がまぎれますよ。」とお話したのである。Nさんは、感謝してすぐ入会したいとTさんに意思表示をした。10月下旬、会費はすぐ入金され我々の仲間になった。会計担当から私に入金の連絡が来たので、先方に電話して初めてお話をした。その後のやり取りの中で分かったことであるが、昨年8月にお母さんを亡くされたが、その前の年の秋にお父さんも亡くされていたことが分かった。さらに昨年の秋には、まだお若い実の姉を病気で亡くするという悲運に見舞われた。1年余りの中で3人もの身内を亡くした悲しみは如何ほどであったことであろう。幸いに二人の立派に成人した息子がいることが、Nさんを立ち直らせたのではと思う。もちろんTさんも都度励まされたようでNさんは随分感謝されている。Nさんは国費留学生として日本に来られた。若いころから苦勞を重ねてこられた様子で、この苦勞が人間を成長させた部分はもちろんあろうが、接してみても優しさや人への気配りや常に控えめなところは生まれ持ったもので、日本人以上に日本人らしさを感じさせる。Nさんは、大連空港でお二人に出会えたのは、亡くなった母の導きと思っていると私に話されたことがある。私が「これこそ中国の諺の〈有縁千里来相会〉ですね」、と言うと「その通りです。感謝しかありません。」と肯いておられた。

この旅行記の第1回目の冒頭に、〈今回の旅はどのようにして二人の中国への認識が好転するに至ったかも、都度出来事を挿入しながら綴っていきたい〉と書いた。二人の優しい李さん、娘さん一家、行き帰りの飛行機の隣の座席の感じのいい中国人、混みあう大連駅での整列乗車など普段テレビなどで見る中国人とはかなり違った印象を受けたらしいが、最も認識が好転したのは、Nさんとの出会いと確信する。今回のお爺さん三人の大連の旅は、珍道中であったが心に深く残る旅となった。三人でコーヒーを飲みながら、また中国に旅をしようと話し合っている。（完）

新元号「令和」への思い

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄

4月1日の新元号公表をテレビで目にした時、多くの方々がそうであったように、予想外で少々驚きました。菅長官の説明を聞いた後も、『万葉集』梅花32篇の『序文』から取ったということだけは了解しましたが、私自身、その部分を読んだ記憶がなく、自らの不明を恥じたりもしました。

序文にある「初春令月」ですが、令月という言葉は日本でも中国でも現代語としては耳にしたことがありません。私の頭に浮かんだのは「令」の字が、多くの場合美称として使われることです。「令息」、「令嬢」などがその一例です。中国でも「令愛」（相手の娘）、「令夫人」（相手の妻）などが時として使われます。また土産物のケースや包装紙に「時令食品」（季節の食べ物）と書いてあるのをよく見かけます。この場合「時令」とは「節日」、日本でいう節句のことです。

では古典世界ではどうかと調べてみたところ、^{ぎらい}『儀礼』に「^{れいげつきちじつ}令月吉日」という言葉がありました。^{きつげつれいしん}「吉月令辰」というものもあります。「令月」といっても「吉月」といっても意味は同じです。つまり、「令」も「吉」も同じく「めでたい」という意味です。『儀礼』にはこの日に元服の儀を執り行うことが書かれています。

さて、この度の新元号は旧来の漢籍からではなく国書から選ばれたと、安倍総理が誇らしげに宣言する一方で、マスメディアの一部あるいはネット上では、そのもとになる^{ちやうこう}張衡（78～139）の^{きでんふ}『帰田賦』の存在が取りあげられています。中国でも同様な現象が起きているようです。

『帰田賦』は『文選』にも採録されているので当時の日本の貴族・文人ならば当然丸暗記するほど読み込んでいるはずです。大伴旅人の記したと言われる『序文』に、似たような文句が出てきたとしても

何ら不思議ではありません。念のため両者を比較してみましょう。

于時、初春令月、氣淑風和…「序文」…『万葉集』
於時、仲春令月、時和氣清…「帰田賦」…『文選』
非常によく似た文章で、「令和」の2文字も両者に共通しています。影響関係があることは一目瞭然でしょう。もちろん、『万葉集』が『文選』の影響を受けているということです。だからといって盗作ということではありません。古の名文に似せた文章が書けるということは、それだけ学があるということの証明でもあります。

違う所と云えば、前者が梅園を題材としているのに対して後者は田園を題材としていることです。全文を通して読んでみても、後者に梅の花は出てきません。この頃はまだ中国にも梅花を愛でる習慣は無かったようです。梅は中国最古の詩集『詩経』にも出てきますが、梅が珍重されたのは、その実に薬効があるからでした。

日本人が梅花を愛でるようになったのも、そう古いことではありません。この「序文」の書かれたころがそのハシリであったと言われていています。だとすれば8世紀半ばということになります。では中国ではどうかというと、梅花を読んだ詩が盛んになったのは六朝時代、西暦で言えば6世紀ごろのことです。漢代から民間に伝わる歌謡のスタイルに^{がふ}「楽府」というのがありますが、これは六朝時代には文人の間でも流行していました。このスタイルには楽曲に^{がふだい}応じて題名がついていて、これを「楽府題」といいます。この楽府題の一つに^{ばいからく}「梅花落」というのがあり、当時の中国ではこのスタイルに合わせて多くの文人たちが梅花の詩を作っていたようです。但し同じ「梅花落」と言っても、これはあくまで楽曲の名称がもとになっているので、すべてが梅を題材にしている

とは限りません。この楽府題は日本にも入って来ていて、時代は少し下りますが、有名なところでは嵯峨天皇（786～842）が「梅花落」と題する漢詩を残しています。これは題名通り、梅を歌ったものです。

観梅の文化が中国から遣唐使によって先に九州にもたらされ、都に広まったのは嵯峨天皇より少し前、奈良時代のことです。したがって、大伴旅人が敢えて九州の大宰府で梅花の宴を催したということは、それなりの先進性があったということになります。

さて、『序』の末尾の方に次のような字句が見えます。

詩紀落梅之篇，古今夫何異矣（詩に落梅の篇をらくばい紀しるす。古今夫れ何ぞ異ならんや）

ここで言う「詩」とは、中国の古い詩のことです。「落梅の篇」とは「梅花落」のことを言っているものと思われまふ。昔の日本では、「歌」といえば和歌、「詩」といえば専ら漢詩を指していました。「古今」の「古」とは昔の中国、「今」とは今の日本（当時）を指しています。このことからわかることは、それよりずっと前から中国には梅を詠んだ詩がたくさんあり、それ以前の日本には、それがなかったということです。しかし梅花を愛でたいという気持ちは昔の中国も今の日本も変わらないと言っているわけです。この言葉の裏には、より進んだ中国文化に早く追いつきたいと願う旅人の気持ちが秘められているようにも思われます。

ここで今一つ気づいたことは、『帰田賦』では「仲春令月」となっているのに対して「序」では「初春令月」となっていることです。「仲春」とは二月、「初春」とは一月のことです。旅人が宴を開いたのが天平2年正月13日ですから正に「初春」に当たります。これに「令月」を当てたのは、古代中国の表現習慣にはそぐわないような気も致します。しかしこれにどういう意図が働いたのかはよくわかりません。「初春令月」は旅人の造語なのか、あるいは「令月」はもともと二月に限らず幅広く使われていた言葉なのかもしれません。

ところで日本人の季節に対する感受性は独特のもので、この感性が日本固有の文化を築き上げたという話をよく耳にします。私も常々そのように思っていました。したがって、これに異議を唱える気は毛頭ありません。しかし、その感性を歌に詠み込み、文学といえる領域にまで昇華させることが出来たのは、この「序」が示す通り、中国文化の影響なしには考えられません。

安倍総理のみならず、最近の論調を見ると、日本文化から中国文化の影響を切り離そうという傾向が感じ取れます。私としてはこれには賛同しかねます。だからといって中国べったりというわけではありません。日本人はこれまで中国から多くのものを学び、そのエッセンスを吸収し、保存してきました。その努力たるや大変なものです。その努力の中から、日本独自の文化が生まれたと言っても過言ではありません。

今の中国では忘れ去られたかに見える優れた文化が、日本に息づいている例は数多く見られます。日本各地の寺社に残る行事、雅楽や能楽、正倉院に残された楽器や仮面等、多くは中国から来たものですが、中国ではとっくの昔に消失しています。魯迅がかつて注目した版画などもその顕著な一例です。その忘れ去られた文化を掘り起こすために中国から日本を目指す留学生も後を絶ちません。中には江戸時代の儒学や漢詩を研究するためにやって来る人たちもいます。いわば中国文化の里帰りです。こういう留学生には無条件に拍手を送りたいと私は思っています。

政治や経済の上ではこれからもいろいろ軋轢があるかもしれませんが、両国民が互いの文化を認め合い、学び合うことを忘れなければ、日中間の未来はさほど暗いものにはならないはずです。「令和」がその絆を示す合言葉となって定着することを、私としては願ってやみません。

現在のボン教（中国語で苯教または波恩教）の最高神^注は、中国語で斯巴傑姆（発音はスバジエモで宇宙の女王の意味）、ギャロン・チベット語の方言の一つでスパ・ギャルモ（ワイリー式転写字表記で“sridpai rgyalmo”、チベット語の発音はスイペ・ギャルモ、古老の女王の意味）で、ボン教のお寺の壁画や民族用品店で売られている掛け軸の形で見られます。また社会情勢の変化によってチベット仏教に改

宗した元々古い歴史を持つボン教だったお寺の金堂等にも、スパ・ギャルモの壁画が残されています。優れた絵師が何百年も昔に描き戦乱を生き抜いて継承されている迫力ある素晴らしい壁画は少なく、ボン教の古刹が多い女王谷でもお目に掛かれるのは稀です。

その一つが丹巴の約1000年の歴史を持つボン教のお寺に残っていますが、傷つけられたり破壊された

部位が多いためパソコン上で修復した画像をご紹介します(写真1)。

スパ・ギャルモは魔除けのために憤怒の形相を作り、驢馬の背に人皮を敷いて上座し、6本の腕に敵の力を削ぎ生死を御す剣（左上）や悪霊を破壊し飲み込む血を満たした頭蓋（右下）等の6種の法器を持つおどろおどろしい姿を取っています。また現代ボン教はチベット仏教の影響を受けていると言われる通り、スパ・ギャルモは仏陀の護法神ともされ、頭の上に小さな仏陀を配している（化仏）のに加え、壁画の描き方もチベット仏教の其れに似ています(写真2)。

少し話が外れますが、



写真1：スパ・ギャルモの壁画（修復画）



写真 2：チベット西部に在るグゲ王国（中国語で古格王国）ツァパラン遺跡の山頂の経堂に残る壁画。経堂は 11 世紀にアティエーシャ “Atisha”（中国語で阿底峽）が伝えたチベット仏教カダム派（中国語で西藏仏教カ達姆派、後のゲルク派）です。

古い歴史を持つボン教のお寺には、夕闇が迫る頃に土壇で火を焚いて周囲を踊りながら神々に豊穰を祈ったり供物を火に投じる護摩の修法が伝承されていて、古代ペルシャの拝火教とインドの仏教（元々はバラモン教）の両方から影響を受けていると考えられています(写真 3)。



写真 3：火を焚いて踊りながら神々に豊穰を祈り供物を投じる僧たち。ここは古い歴史を持つボン教寺で、チョスジャ（中国語で綽斯甲）公国領主に繋がる。

■注

ボン経の最高神：7 世紀に吐蕃王国のソンツェンガンポ（中国語で松贊干布）に滅ぼされる以前、シャンシュン王国（中国語で象雄王国）の時代に興った古代のボン教は、9 世紀以後チベット仏教に同化した現在のボン教とは異なっていました。古代のボン教の最高神は「生命の女王」だったと伝えられ、前回の四姑娘山・写真だよりでご紹介した「湖の女王」のような背景と性格を持っていたと考えられます。

●大川さんのホームページはこちら <http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ：女王谷の HP (<http://rgyalmorong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ（MP4 形式 8MB 前後）1 分余り×15 本を追加しました。日本語 HP に入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。（<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>）

今日のお題は中唐期の詩人、劉禹錫（772～842）の七言絶句です。劉禹錫は日本ではあまり知られていませんが、中国ではとても有名です。劉禹錫の名を聞けば、誰もがその作風をイメージ出来るほど人気があるそうです。

劉禹錫は、日本ではお馴染みの白居易（772～786）と同年です。また柳宗元（773～819）とは同期で793年に科挙に合格し進士となっています。白居易と同様、下級官僚階層の出身で、一説には匈奴の末裔とも伝えられています。科挙の合格は22歳（数え年）、白居易より7年早く宮仕えします。

当時は政治の中心が貴族からエリート官僚に移る過渡期でした。そのはざまに立ちはだかっていたのが宦官たちです。宦官は宮廷内の闇の集団として、権力をほしいままにしていました。したがって当時の官僚世界は、若くて有能な新進官僚にとって必ずしも居心地よいものではありませんでした。そのため彼らの間では革新の機運が一気に高まっていました。劉禹錫は科挙に合格した後、同期の柳宗元らと共に、革新派の王叔文を中心とした改革運動に加わりますが、あまりに改革を急いだため、運動は失敗に終わり、王叔文は死罪となり、劉禹錫も左遷されます。11年後に都に戻されたものの、その時書いた詩をまた政府批判の詩だと見なされ、再度左遷されるのです。白居易と出会うのは54歳の時、ようやく左遷が解かれて都に帰る途中のことでした。

同年で、何れも高名な人物であり、間接的には互いを知り尽くしていたものの、人生の後半期にようやくめぐり逢えたのでした。出逢った途端に二人は意気投合し、劉禹錫が世を去るまで交流を深めたそうです。同年で共に宮仕えをしたとはいえ、進士になった年代が白居易の方が遅く、また双方が政治批判のために時を異にして左遷されていたので、すれ違い続きだったのでしょう。メールも電話もない時代、出逢いの喜びは相当深いものだったに違いありません。生まれ年だけでなく、出身階層も、政治

批判で左遷されたことも同様なら、また共に音楽の才能に恵まれた詩人という点でも二人は共通していました。このように共通項が多々あった二人、「この二人が二度目に出会った時、互いに酒を酌み交わしながら、箸で皿を叩いて唱和したという喜びの詩を白居易は残しています。「素晴らしいですねえ。私もこういう友人が欲しいですね。」と植田先生。

お酒を飲みながら皿を叩いて共に唱和した様子を思い浮かべると、なんだか和気藹々とした楽しい雰囲気伝わってくるようです。

さて、連州（広東省）、朗州（湖南省）など、左遷を重ねて南方各地を転々としていた劉禹錫は、左遷先に伝わる各地の民謡に造詣を深めていきます。「竹枝詞」とはその民謡のスタイルの一つです。他に「楊柳枝詞」「踏歌」などがありますが、これらの民謡を、洗練された絶句スタイルに仕上げたことが劉禹錫の功績として知られています。この『竹枝詞二首其一』も、民謡調を完璧な七言絶句にアレンジしています。

zhú zhī cí èr shǒu qí qí
竹 枝 詞 二 首 其 其
liú yǔ xī
刘 禹 锡

yáng liǔ qīng qīng jiāng shuǐ píng
杨 柳 青 青 江 水 平
wén láng jiāng shàng chàng gē shēng
闻 郎 江 上 唱 歌 声
dōng biān rì chū xī biān yǔ
东 边 日 出 西 边 雨
dào shì wú qíng què yǒu qíng
道 是 无 情 却 有 情

ようりゅうせいせい こうすい
楊柳青青として江水平かなり
ろう こうじょう しょうか
郎の江上に唱歌するを聞く
とうへん ひい
東辺に日出でて西辺に雨
これ はれな い かえ しょう
是れ晴無きと道うも却って情あり

一句目。長江のほとりに青青とした枝垂れ柳が立ち並んでいます。春の長江は上流からの雪解け水を

満々と湛えてゆったりと流れています。「平」とは水かさが増して水面が岸边と平らかになった状態をいいます。

二句目。若い男が大河のほとりで歌う声が聞こえてきます。これは、当時の風習で、年に一度の祭りの日に男女が互いに歌い合っ、歌の好みやセンスの合う結婚相手を探すという、今でいう集団見合いや合コンのようなものでした。若い男女の真剣な恋の歌合戦です。日本でも万葉時代に歌垣という風習があったそうですが、おそらくそれに似たものでしょう。

三句目は東に日が出ているのに、西側は雨が降り出した。お天気雨でしょうか。川辺に広がる雄大な景色が目には浮かびます。

四句目。晴れが無いというのに却って情がある。書き下し文で読むと何を言っているのかよく分かりませんが、中国語では「晴」と「情」は同じ音。「無晴」とはシャレ言葉で「無情」の意味です。「無晴(情)」と「有情(晴)」、つまり恋の相手は自分に気が有るのかないのか、さっぱりわからないという意味になります。三句目と四句目は恐らく男の子の歌う歌詞の引きうつしでしょう。

この風習は若者達にとっては伴侶選びの場であり、ある意味一生を左右する大事な行事です。あぶれたら大変です。本当にあの娘は自分に気があるのだろうか？ ハラハラする若い男子の心のうちが伝わるようです。

ここまで読むと、三句目の東は晴れで、西は雨という天気の写真も、つかみどころのない女心の暗示とも思えてきます。

日本語でも「キラキライも好きのうち」なんて言いますが、不安定な恋の始まりは、みずみずしい若葉の季節とも重なり、読み手に明るく健康的な空気をもたらしてくれます。同時に作詩のスタイルも七言絶句の作法にぴったり合っています。一見俗っぽいようで、かつ上品という絶妙さも見事です。

訓読するとどうしても硬いイメージが抜けませんが、中国語で読んでみると非常に読みやすく、各句に散りばめられた鼻音韻尾のng音が耳に心地よいのが印象的です。

劉禹錫は白居易以上に、左遷先の人々の言葉や生活に馴染んでいたようです。二人が出会ってから、白居易も民謡調をモチーフにした作品を書いていることから、劉禹錫の影響を受けたことが考えられます。劉禹錫のことを「詩豪」と称賛していたことから、白居易が彼に一目置いていたのではないかと考えられます。

さて、白居易は日本で大変な人気でしたが、この劉禹錫という人物とその作品は日本ではあまり知られていません。このような現象はよくあることで、日本人と中国人の好みの違いもあるかと思いますが、また同時に、訓読と原語で読んだときの印象の違いも、この詩を音読してみるとよく分かります。やはり、漢詩が音の世界でもあることを改めて思い知らせてくれます。

この詩も最初、植田先生が訓読されましたが「書き下しの日本語で読むと、この詩のどこが良いんだ？と思うんですけどね。中国語で繰り返し読んでうちに、なるほどこれが民俗色豊かな漢詩の真骨頂なんだな、と思えてくるんですね」という前置きで、今回も中国語の読み練習が始まりました。

情景を思い描きつつ、その情景に音をのせていきますと、ふとその時代のその場所へタイムスリップしたかのような気になります。アラフォー女子も今度生まれ変わったら、大自然の中、春の川辺で歌を交わして、気の合う伴侶を探す、なんて、明るく健康的で、しかもドキドキするような経験をしてみたい！と思わずにいられませんでした。ほんに羨ましい。

*** ** ** ** **

二首目も劉禹錫の作品で「踏歌四首其一」という七言絶句です。「踏歌」も「竹枝詞」と同様、民謡スタイルの一種で、足を踏みならして拍子をとりながら歌うことからこの名がついたそうです。ちなみに李白の有名な七言絶句『贈王倫』(王倫に贈る)にもこの「踏歌」のことが出てきます。

「踏歌」を辞書で引きますと、「奈良から平安時代に行われた群舞形式の歌舞。中国から移入された芸能であるが、次第に日本化し、これより古くからあった歌垣とも合体して流行した」とあります。また宮中行事としても行われていたようです。唐の時代、

中国の各地で行われていた行事が、日本にも伝わっていたのです。そして本家の中国ではおそらく少数民族の一部を除いて、類似の慣習は消滅したと思われませんが、日本では今現在も大阪住吉神社、名古屋熱田神宮、熊本阿蘇神社などで、形を変えつつも神事の一つとして脈脈と受け継がれていると聞けば、感慨深いものがありますね。これもまた植田先生が常々仰っている「日本は中国文化の冷凍庫である」という事例の一つかと思えます。なお中国でも少数民族の間では、この風習は後世まで続いていたようです。今では南方のある地域で観光の目玉にもなっていると聞きます。

さてこの詩、一句目は「春江」とありますが、春になると、長江は上流の雪解け水で増水します。「月出でて」というのは、春の満月の晩に満々と水を湛えた川辺で集団見合いをやっている情景なのですが、二句目の「堤上の女郎」とは、堤の上を女の子達が集まって歩いていく様子を表しています。ここでの女郎とは、普通の若い娘さんのことです。

なんだか春の息吹きと共に若い男女のざわめきが聞こえてきそうな一、二句目です。ところが、続く第三句目は、この日のために用意した苦心の作をすべて歌い尽くしても、「歓見れず」と、一人の女性の胸の内を描いています。「歓」とは、ここでは意中の人、彼氏を指します。男女が歌を交わしながら、気の合う人を見つけなければならぬこの行事で、周りの女の子が次々と相手を見つけ、二人で何処かに消えていくなか、夜通し歌い尽くしても、相手が現れないのは何とも寂しいことですね。

第四句目の「紅霞樹に映じて鷓鴣鳴けり」とは、朝焼けに映えて木々や草木の姿が見え始める頃になって、シャコの寂しく鳴く声が聞こえるというのです。シャコはキジ科の鳥で、鳴き声は鶏に似ていますが、どことなく物悲し気な響きがあります。このシャコは李白の七言絶句『越中懐古』にも出てきますが、「シャコが鳴く」という表現自体が寂しさを連想させるものです。劉禹錫はこの表現を借りて、意中の彼と出会えなかった女性の心の内を見事に写し出しています。若い女性が恋人を求めて朝まで歌い続けるというのは、漢民族の風習としては考えにく

いことですが、この時代の南方諸地域は漢民族の儒教文化がまだ浸透していませんでした。このような素朴でエキゾチックな風習が、かえって作者の心を強く刺激したようです。

ただこの第四句目の「紅霞」は夕焼けともとれますが、この歌会の行事は、月が出た頃から始まっているということでもあるので、この場合の「紅霞」は朝焼けを指し、シャコの声が早朝の森に寂しくこだましているということかと思われまます。劉禹錫のこの他の作品にも、夜通し男女が歌い交わす行事を題材にしたものがあるとのことですから、この詩に詠われた行事もそうだった可能性が高いですね。

何れにしても、歌声と作詞のセンスから相手を判断するというのは、現代においても新鮮ではないかと思いました。アラフォー女子の独断と偏見ですが、異性の歌声もさることながら、言葉に対するセンスの一致もかなり重要じゃないかなあ、なんて思います。

さて、この詩に詠まれた女性、次の機会には素敵な伴侶に巡り会えたでしょうか。そうあって欲しいと願わずにはられません。千年以上も前に生きた、名もない女性たちの気持ちが、一篇の詩を通して時代と国境を越えて、今を生きる私達と瞬時に繋がる… これも漢詩の尽きない魅力の一つなのです。

tà	gē	sì	shǒu	qí	yī	
踏	歌	四	首	其	一	
	liú	yǔ	xī			
	刘	禹	锡			
chūn	jiāng	yuè	chū	dà	dī	píng
春	江	月	出	大	堤	平
dī	shàng	nǚ	láng	lián	mèi	xíng
堤	上	女	郎	连	袂	行
chàng	jìn	xīn	cí	huān	bú	jiàn
唱	尽	新	词	欢	不	见
hóng	xiá	yǐng	shù	zhè	gū	míng
红	霞	映	树	鷓	鴣	鸣

しゅんこうつき い てい
春江月出でて堤平らかなり
ていじょう じょうろつたもと
堤上の女郎袂を連ねて行く
きみあらわ
新詞を歌い尽くすも歓見れず
こうか き しやこ
紅霞樹に映じて鷓鴣鳴けり

この詩もやはり ng 韻尾が美しく響きますね。

海外出張の思い出（ナイジェリア編④）

高島敬明

1979年（昭和54年）7月にナイジェリアに到着して7日目の夕方、嫌な予感が的中しました。内陸部のサイト（カドナの現場）で人身事故があり、当社の大型クレーンが関係した死亡事故が発生したとの一報が入りました。総括のSマネージャーに呼ばれHマネと支店に急行しました。Sさんは、「短波無線電話なので詳しい内容は分からないが死亡事故は間違いなく起こっている。貴方の会社ではサイト責任者（当社K支店長）は事故報告で帰国、ラゴス港の責任者のU次長も交代、つまり高島係長あなたの職責が一番上席です。すぐに明日現場に向かってください。」と言います。私は、「私はまだこちらに来て7日目で右も左も分かりません。現場のカドナも工事の内容も地理も分からない私は適任とは思えませんが」とSさんとHさんに話しましたがつれな返事でした。「現在あなたはN社の最高責任者ですから。現地の警察も当然入るでしょうから当事者である会社のトップが行くのは当たり前です。警察の判断によっては当事者は拘束され裁判にならないとも言えません。まあ心配ないですよ、高島さん」と、言われました。万事休すです！

翌朝Hマネから15時発のチケットが取れたからそれで行ってください、と言われすぐに1週間の出張予定で準備にかかりました。当日運転手のエマニエル大尉を急き立てて空港に行きました。国内線のカウンターには誰も見当たらず時々現れる航空会社の人にも愛想笑いをするだけです。後ろを振り返るとなんと飛行機に向かって皆さん並んでいるのです。列の後ろの人に「カドナ行きの飛行機ですか？」と聞くとそうだというので急いで並びました。15時発が随分と遅れ2時間くらい経った時、飛行機の扉が開くと皆さん一斉に走り出したのです。私はカバン一つなので競争では10番の中に入りましたが、大きな荷物を抱えたご婦人は大変でした。搭乗は終わり満席になりました。外を見ると20～30

人くらいの人が拳を振り上げ抗議していました。後で聞いた話ですが国内線は必ずオーバーブッキングになっているのだそうです。袖の下で航空券を社員が個人的に売っているのだそうです。日本の常識では考えられないことですが……

薄暮の中飛行機は離陸しました。機内は電線の焦げるような匂いがし始め、何かあったらどうするかと心配しましたが平穩に飛行を続けています。改めて機内を見回すと映画にでも出てくるような帽子を被った若い白人のご婦人がいます。白人の女性には必ず年取った黒人の女性が付き添っています。英国が統治した植民地だったからかな？ご婦人は農園主のお嬢さんかな？などと想像を巡らせているうちにカドナ上空に差し掛かったようです。飛行機は大きく旋回していました。真っ暗な下を見ると、なぜか大きな花火のような光がピカピカと玉になって見えました。飛行機も心なしかブルブルと振動が大きくなってきます。時計を見ると夜の9時は優に過ぎていました。乗客のざわめきが大きくなってきた時、機内放送が有りました。はっきりとは聞き取れませんが、「嵐で着陸は出来ません。カノー～」と言っているようです。私は直感的にカノーに向かうんだなと思いました。カノー空港は目的地のカドナから北に300kmの所にある国際空港です。300kmと簡単に言っても上越新幹線では、東京からおよそ新潟までの距離です。日本の運輸約款からするとカノー空港で降ろされて終わりだなと思いました。なるようにしかならない！と腹を決めて平然とした顔でいました。日本男児、企業戦士、頑張り！と自分を鼓舞しながら少ない知識で最善の策を考えていました。何も解決策が見つからないうちに無事にカノー空港に着陸しました。他の乗客と一緒に飛行機を降りロビーに向かいます。先ほどの直径1mくらいのクジヤクの羽の付いた大きな帽子のご婦人は、昔の貴族の服装の出で立ちで、他のご婦人たちと後から降り

てきました。すると迎えの??人達と「良かったね」「疲れたね」とか言って盛んにハグを始めました。なんで? どうして? 300kmも離れているのにも思いましたが農園主間での通信網でもあるのかもしれませんが。英国の植民地支配を垣間見たような気分がしました。

私には誰も迎えは当然ありません。ホテルに泊まり明日の朝カドナに飛行機で引き返すか? どうしたらいいのか分かりません。ロビーは段々と人も少なくなってきました。その時私はC化工建設の制服を着ていました。ロビーの外からCヨダ、Cヨダと何人か連呼しています。1000ドル、800ドルとかわめいています。やっと気づきました。車という手段があるのです。制服の威光は大変なもので、人のよさそうな運転手と300km先のサイト事務所まで700ドルで合意しました。出発は夜中の12時を回っているようです。車はダットサンブルーバードで前と後ろが丸く下がっているような形状の初期のブルーバードでした。名車と言われただけあって古い車でしたが流石に日本車です。頑張っ走り続けました。町を過ぎると全く暗くなってきます。そのうちお腹が空いて来ました。お昼から何も食べていなかったことに気が付きました。胴巻きには会社から何かあったら、と持たせてくれたお金2000ドルがずしりと重く感じてきました。こんな状況なら運転手の仲間に殺されても分からないな!と心細くなってきます。外を見ると原住民の家々が見えます。真っ暗闇の中、丸い三角の土饅頭のような家が点々と見えます。室内の明かりは蠟燭か油の火でしょうか?中には何人か人がいる気配です。ずっと一人の男が立ち上がりますとその黒い影が大入道のように、蠟燭の火の揺れに連れてゆらゆらと大きくなったり小さくなったりするのです。非常に幻想的ですが別世界にでもいるようで非常な恐怖心を覚えました。車はいくつかの部落を過ぎて行きます。極度の緊張感からか一睡もしないうちに、明るくなった明け方、昨夜の雷雨のためぬかるみの中無事現場事務所に着きました。

事務所には私の到着を待ち望んでいた名古屋支店



炎天下の路地裏・肉と焼き肉のお店

の部下のS君が出迎えてくれました。知り合いに出会って安心したのか疲れがどっと出てきました。私としてはアフリカの全くわけのわからないラゴスに着任したと思ったら、すぐに1000キロ離れたアフリカの何も分からない現場に向かわされ、さらに300キロ離れた空港に投げ出され何も分からない事件事故の真ただ中に放り込まれたと不満だけの気持ちでした。

そんな中このジョブの最高責任者AプロジェクトマネージャーとC化工建設に出向していた私の直属の部下のS主任から私への尋問が始まりました。問題になった点は、私が全く関知していないことでしたが現地の警察が入っていますので簡単な話では済まされないことばかりです。下手に返答もできません。事故の状況など全く説明されずに最初から当社の責任問題に関するばかりです。一つは今回事故を起こした運転手の経歴についてです。Aプロジェクトマネージャーは当社から提出した運転手(事故当事者)の職歴内容について「『20トン小型クレーン運転経験を127トン超大型クレーンの運転経験が5年とベテランの運転手である』との虚意の報告が書かれている」と、わけの分からない私に向かってまくしたてるのです。「そうだよな。S君」。

私は、私が頼りとしているS主任を見ました。出向中とはいえ上司の私に対して彼が冷たく、私を突き放したのには非常なショックを受けました。

次期役員候補だと言われているAプロマネにとっては自らの責任にはしたくないのでしょう。1時間くらいの尋問が終わってようやく現場の安全責任者に引き渡されました。以下は次号に回します。

(つづく)

3度目のソウル近郊ハイキング (上)

2019.5.28~31 関根茂子

昨年5月のソウル近郊ハイキングは、連日の雨で博物館巡りとなり、小雨の中を峨嵯山アチャサンから浅川巧マンウリが眠る忘憂里公園墓地までS姉の友人である韓国山岳会チョ ドンシクの曹・東植氏に引っぱられて歩いただけで、予定した雲吉山ウンギルサンには登れなかった。2度目はその年秋、また雲吉山を計画したが、彰義門チャンイムンから白岳山ベガクサンを経て肅靖門スッチョムンまで漢陽都城ハイキングの翌日は台風接近の雨模様、またまた雲吉山は諦めざるを得なかった。

さて、S姉企画の3度目のソウルハイキング、昨秋のメンバー（70代の女性4人）で、航空券と宿がセットの3泊4日のパックツアー（38,005円）を利用、宿は新規開業の24時間日本語対応のグレイスリーホテルソウルだ。今回は全日程晴天予報、今度こそ雲吉山に登れるぞ。

■5月28日(火)晴

成田空港第2ターミナルの出国審査は、昨秋の仁川空港入国審査と同様の自分でパスポートをスキャナ台に置いてスキャンするシステム、出国スタンプも省略、無人化が進んでいた。イースター航空ZE606便は定時10:50より30分以上遅れて出発したが、仁川空港第1ターミナル定時の13:30到着した。両替レートは日本円1万円=107,000W、昨秋よりかなり良い。共同費として@10,000Wを拠出する。

ホテルはソウル市の市庁駅シチャンから近いが、周囲の様子を知るため空港鉄道普通電車（4,250W+保証金500W）をソウル駅で下りて歩くことにする。地上に出て、地図を頼りに周りを見回すが、どうにもホテルへ至る世宗大路セジョンデロは、どこなのか分からない。そこで若い男性に地図を見せて、ホテルの位置を指差すと、スマホでホテルを検索、電話で確認後、鉄道駅前の大通りを横切って、目標の崇礼門スンニエムンが見えるところまで連れて行ってくれた。

門を抜けた向こうがホテルなのだが、門番が「こ



雲吉山（奥、右端の山）

こは通り抜けられない」と右手を指す。地下道をくぐり抜けた南大門路ナンデムンロを渡ると世宗大路に出て、無事、ホテルに到着。20階建ての11階がロビー、客室はそれから上の階だ。カードキーをエレベーター内のタッチパネルに当てると行き先階に止まる仕組みだった。

格安航空券で昼食はついていなかったので腹ペコだ。荷物を置いて、最寄りの地下鉄1号線市庁駅まで下見と、世宗大路探索に出かける。まずは冷麺と海老餃子（4人分合計33,000W）を食べて空腹を満たす。向かう正面は北漢山ブカンサン、通りには飲食店多数、パン屋もコーヒー店もありホテルは好立地だ。地下鉄1号線7番出口から入って改札口へ。地下鉄交通カードにチャージ（10,000W）する。明日は曹東植氏の案内で清溪山チョンゲサンイブクへ、待ち合わせは清溪山登山口駅2番出口に10時の約束だ。3時間もあれば登れる簡単な山だから「昼は下山後、食堂で」と彼は言うが、そんなわけにはいかないだろう。パンを3種類、購入（8,000W、2人分なので@4,000W）

さて、ホテルの浴室には浴槽にお湯がでるカラン有、洗い場にもカランとシャワーが設備、日本式にきれいなお湯に入って体が洗えるようになっていた。ベッドに入って電気を消そうと枕元にあるはずのスイッチを探す。そのうちにタッチパネルに手が当た



山頂メ峰



下山後の昼食

り、触りまくって何とか消せた。

■5月29日(水)晴

ホテルで豪華に朝食バイキング (@13,200₩) をたっぷり食べて 8:05 ホテル出発。地下鉄1号線市庁チョンノサムガ駅から鍾路3街で3号線に乗り換えて良才まで行く。ここで新盆唐線シンボンダンに乗り換え、2つ目が清溪山登山口駅 9:20 だ。駅のトイレの扉は閉まっている状態だと一続きの風景写真になる素晴らしい造りだった。

2番出口の表示でエスカレーターを2回も乗り継ぎ地上へ、待ち合わせらしい韓国人グループがベンチに座っている。地上は日差しが暑くて地下に戻り改札口を見張っていたが、10時を回っても現れない。もしかして地上かと上へ行く途中、行き違いの下りエスカレーターに彼の姿が……。下山口に車を置いて、バスで駅に来たのだった。

ハイキング開始 10:10、足の速い彼についていくのは、はじめから諦めてはいるものの、あまり遅れるのも申し訳ない？ よく整備された階段道を周りの植物を見ながら歩いていく。平日でもハイカーで賑わい高尾山なみの人出だ。ポイントで遅れる私を待っては、再び進むことを繰り返しながら登って、メ峰メボンに 12:18 到着。彼曰く「清溪山本峰というべき最も高い標高 618m の望景峰マンギョンボンは、軍施設に占拠されていて立入禁止」とのこと。

混雑するメ峰の先の望景峰方向に尾根を進み、下山コース分岐でひと休み。谷沿いのまき下り道は階

段が少なく足に優しい。足元にハクウンボクの花が落ちていた。以後、ハクウンボクの幼木がやたらに目につく。踏みしだく松葉をよくよく見れば 3 本葉だった。

車道に下り着いた右手は軍施設入口 14:18 で左に歩くと立派なお寺(チョンドサ)が見えてくる。お寺に入るとハンテンボクの大きな木に花がたくさんついている。イタチハギもあった。チョさんが予約の昼食店に着いたのは 14:30。昼時を大幅に過ぎていたので貸し切り状態だ。早速、料理が運ばれてくる。牛肉と豚肉の焼肉がメインのおかず、白米の釜飯は御飯をどんぶりに全部盛って、お焦げの付いた釜にホウジ茶？ をたっぷり注いで蓋をする。食事の終わりにはお焦げがすっかりはがれ、注いだお茶とともに食べられるのだ。これが結構、おいしかった。(@15,000₩)

食後、チョさんの車で3号線の南部ターミナル駅に送ってもらう。お土産にソウル銘菓のクルミ入りカステラボールの箱詰めをいただく。お礼の意味で昼食代を私達が支払ったのが、かえって彼に散財をさせてしまったようで申し訳なかった。帰りはウルチロサムガ乙支路3街駅で2号線に乗り換えて市庁駅に戻った。地下鉄駅の構内は複雑だが、立っていた案内人にホテルに近い1号線の7番出口を教えてもらって無事に帰館できた。遅い昼御飯だったので、持っていたパンを少しかじって夕食とする。(以下次号)

暗唱 李晴

高校生の頃私は朝早く起きて校庭へ行き暗唱をするのがとても好きだった。その頃は腕時計などは持っていなかったの、一旦目を覚ましたらもう一度また眠ることが出来なかった。そういう訳でどんなに早くても目を覚ましたらすぐに起き上がったものだった。ある時ひどく早く目を覚ましたことがあった。宿舎のドアを開けてみると空には星が点点と光っていて、明るい月がまだ中空に懸かっていた。そっとドアを押し開けて外へ出て、校庭の長い小道を歩いた。月明かりの下の校庭は全てがぼんやりとし見え、ひっそりと静まり返っていた。

学校は起床時間にならないと電灯を点けなかった。そのため早起きをして暗唱をしに行くときは、いつも手にランプを下げたものだった。そのランプは私の手作りの油灯だった。ごくありきたりのインク瓶と、綿糸一束、自転車のタイヤについている空気入れバルブが一個、材料はそれだけだった。バルブのなかに綿糸を差込んで灯芯にし、バルブの先にはナットをつけて、ひねると灯光が大きくなったり小さくなったり、明るくもなり、暗くもなるようにした。さらに風を防ぐために、インク瓶の外側にダルマのようなガラスの覆いをつけた。光りは明明として、ちょうど村の人が夜分に家畜に餌をやるときに使う馬灯に似ていた。時に風がさっと吹き付けると、覆いのかぶさったランプはゆらゆらと揺れ、光りがきらきらとこぼれて、まるで光り輝く星を下げて歩いているような感じがしたものだ。

私は静けさが好きな性格なので、早朝の暗唱もよく人目に付かない静かなところを探した。その頃私が好んで選んだのは校庭の片隅の豚小屋だった。実際、豚の糞尿の匂いを除けば、よく掃除が行き届い

た清潔なところだった。砂利を敷いた小道、石板を積み上げた囲い、少し湿っぽく霧のかかったような大気、ひんやりと冷たい石板。その上に腰をかけて暗唱をするのは本当に何もかもが新鮮で、清しく、爽快な気持ちになったものだった。暗唱をするものは、歴史、地理、文学、英語のほかに、さらに毎日必ず自分に課するものがあった。それは「唐詩三百首」の本で、黄色に変色してしまった麻の紙に昔の字体で石版印刷されたとても古いものだった。一首一首、一頁一頁、明け方の風がふっとランプをかすめてゆくなか、私はゆっくりとすべてを暗唱していった。この日々、一日一日と過ぎてゆく日々、すべてはこのランプの下で、私の朗朗と暗唱をする声のなかから繰り返し、繰り返しあられ通り過ぎていったものだった。

私が引き起こす騒ぎに、豚たちも慌てふためき、大混乱をおこした。豚たちはふがふがと鳴き声を上げながら突付きあい、ひどく興奮をして飛び上がり、鼻先で私が囲いの上に置いたランプを突付こうとするものもあった。しかし、日がたつにつれ、そんなことにもすっかり慣れてしまった。

私は私で暗唱をし、豚は豚の眠りをむさぼっていた。豚たちが互いに寄り添いあい、ともに餌を食べ、鼻を鳴らしているのを見ると、私の心はどんなにか落ち着いたことだったろう。彼らと一緒にいると辺りのぼんやりとしたものや、ゆらゆら揺れ動いているものや、急に明るくなったり暗くなったりする、何だかわけのわからないものは全てたちどころに私のところから遠く離れていった。

冬になると早朝の暗唱はもう心の満ち足りたものとは言えなくなってきた。豚小屋は校庭の一隅にあ

り、冷たい風が学校の低い塀を越えてひゅうひゅうと吹き渡ってくる。私はランプが風で吹き消されないようにいつも風上に座って風を遮った。手はしびれ、足もしびれ、耳もしびれてしまった。黄色い光の輪の下で脚をばたばたさせながら、空が明るむまで暗唱を続けた。時には雪が降ってくる時もあった。小さな雪の花がくるくると廻りながら降り、ランプの覆いの上にそっと落ち、ツツと小さな音をたてる。まるで無数の小さな蛾が飛んでいるようだった。

冬休みに入り私は家に戻った。母は私の霜やけで赤く腫れ上がった手を見ると息を呑み、涙をこぼした。私の両脚はすっかりただれてしまい、ズボンに脚にべったりとくっつき、脱がすことができなかった。さらにひどかったのは、早朝の暗唱にすっぴんのめり込み、自分でもわからないほど体力が消耗していたことだった。家に戻るなりベッドに倒れこみ、7日7晩食事のときを除いて、ずっと眠りつづけ、母を心底心配させてしまったのだった。

今、私はもうランプを使うことは無くなった。しかし誰かが「学校へ何年も行ったけど、何を勉強したのか覚えていない、時間の無駄だった」というようなことを聞くと、私はすぐにあの頃のひたすら知識を求めた毎日、「一寸の金をもってしても一寸の光陰を買うことは出来ない」という諺のとおり、時間の足りなさを嘆いた頃のことを思い出す。

(2001年7月号より)

〔訳者から：翻訳の際に李晴の学校生活に関し、訳者がいろいろと質問をしたのに対し、下のような説明が届きました。彼女の作品の背景といえるもので、一層これまでの作品の内容や登場人物に近づく事ができました。ご参考までにお読みいただけたら幸いです〕

私は文化大革命が始まったばかりの頃に生まれま

した。でも、私の故郷は大きな町からはとても遠い辺鄙なところの、貧しい小さな村だったので、1960年代には基本的に革命運動の大きな影響や衝突はありませんでした。私が小学校に入ったとき学校はまだ正常に授業をしていました。1年、2年のときは毎日ランドセルを背負って学校へ行きました。4年、5年生になると学校は基本的に授業はおこないませんでした(大体74年ごろのことだったと思います)。春になり新学期が始まると、私たちはすぐにツルハシを担いで長く伸びた草で荒れ放題の山の斜面に行き、開墾をしました。そこは学校から随分と離れた山奥で2時間ほどかかってやっとたどり着くところでした。朝早く、時にはまだ空に星がある頃に起きて出発します。地面を掘ったらすぐに種をまきます、私たちの学校は大体500ヘクタールの土地に種を蒔きました、蒔いたものはアワ、キビ、トウモロコシ、小麦、ジャガイモ、ごま、えんどう豆、からし菜などでした。男子生徒は前に出て穴を掘り、女子生徒は後ろにいて種の入った腕を抱え、一つの穴に一粒の種を蒔いて行きます。皆裸足でした。穀物の苗が伸びてきたら、すぐに鋤をつかって除草をしたり、苗の間引きをします。最低3回は除草をしなければなりません。だから、夏中激しい陽の光の下で働くことになり、学校へ行くことなどありませんでした。一番忙しく、とても疲れたことは、夏と秋の収穫の時でした。私たちは種を蒔いた作物を今度は収穫して、穀場まで運ばなければなりません。ジャガイモを掘りおこしたり、ムギや穀類を刈り取ったり、すべて2本の手で鎌を使って刈り取らなければいけません。昼も家に帰ってご飯を食べず、簡単な食べ物を持参して、畑で食べました。仕事が終わると、皆一人ずつ背中にジャガイモや穀物が入った袋を担いで村の脱穀場まで持って行きます。私たちの小学校にはおよそ20人ほどの生徒

がいました。その子供達にとって 500 ヘクタールの土地の穫り入れは本当に疲れるものでした。

冬になると私たちには段々畑の修理がありました。崩れた縁を直したり、石を運んだり、手押し車で土を運んだり。私の故郷の冬はとても厳しく、子供にとっては本当に辛い労働でした。春や秋はさらに植樹もしました。だから一年間四季の農作業について私は大体のことをいまでもやれます。そのほか、私たちの学校では数百匹の羊と百匹ほどのウサギを飼っていましたので、秋には冬の間の餌として一人数百斤の草を用意しなければなりませんでした（「一掬いの冷たい羊肉」）。

私の学校は「驟先生」でも書いたように先生が一人、教室も一つのとても小さなものでした。教室は狭くガランとしていて、まともな机やベンチがありませんでした。レンガを積んで二つの円柱のようなものを作って、その上に板を載せます。丈の高いほうを机にし、低い方をベンチにしました。主な科目は国語と算数の二科目で、その他の音楽や、美術、体育、理科などは習いませんでした。時には歌を歌うこともありましたが、当時の“革命”の歌、例えば‘文化大革命は本当に素晴らしい’といったものでした。一つだけの教室には複数の学年の生徒がいました。先生が一つの学年を教えたら、次の学年に移るといった‘複式学級’で、中国の農村では何処もこんな風です。

1978 年、文化大革命が終わったばかりの頃、私は村の初級中学 2 年生になっていました。以前の中国の学校は春が入学の時期でしたが、1978 年から秋に変わりました。そこで、1978 年の春に、半年の時間の余裕があったので、初級中学 2 年生は皆地元で集中的な学習と復習を受けました。小学校の後半には全然授業がありませんでした。教科書は全部新しいものでしたけれど、一頁も開いたことはありません

でした。ですからその当時の私の基礎学力は随分低いものでした。でも私の作文の成績はよいものでした。労働のかたわら随分たくさん小説を読み、数百の唐詩を暗記しました。私の記憶力もとてもよかったです。新しく学ぶものは先生が教えてくださると直ちに覚えました。それで重点高校にも合格できたのです。私のいた受験準備のクラスには 50 人以上の生徒がいましたが、合格したのは私一人でした。武先生は私に本当に善くしてくださいました（「六月の思い出」）。

高校の私のクラスには 40 人以上の学生がいました。そのほとんどは県城(行政の中心地)の比較的裕福な地域の出身で、私のようなとても辺鄙な貧しい地域の学生は非常に少なかったのです。県城の学生は学校生活に恵まれていたといえるでしょう。彼らは小学校は 6 年間、初級中学は 3 年間だったように覚えています。でも私たち貧しい地区の子供達は小学校は 5 年間、初級中学は 2 年間だけでした。その他彼らは、音楽、美術、体育、歴史、地理、化学、物理、英語などの課目を習っていました。だから彼らと私との学力の差は本当に大きく、私は随分努力をして勉強をしなければなりませんでした。朝早く起きて暗記をして、やっと彼らに追いつき、追い越せました。（訳者：岩田温子）

・・*・*・*・*

この後、李晴は県の師範学院の国文科に進み、18 歳で教員として中学校で国語を教えることになります。10 年間の国全体の大混乱に加え、貧しい農村にたまたま生まれてしまったために与えられたさまざまな試練、それを乗り越えるために払った努力と気迫には翻訳をしながら圧倒されてしまいました。これで私の友人李晴の学生時代の話を終えます。つたない翻訳にお付き合いくださいましてありがとうございました。（岩田温子）

ようこそ！ SAMIRA イラスト館へ

フランスからはるばる届いた、サミラさんのイラストです。皆さんはどんなことをイメージされますか。



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これほと思う楽しいイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

▼7月の定例会

7月11日(木)・・・13:30～ 三輪センター第三会議室

▼8月の定例会

8月13日(火)・・・13:30～ 三輪センター第三会議室

※8月の‘わんりい’はお休みします。どうぞよい夏をお過ごしください。

※ 連載中の、「東西文明の比較」(塩澤広宣さん寄稿)は都合により休載しました。

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎しています
年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
途中入会の方には会費の割引があります。

下記へお問い合わせください。

問合せ：044-986-4195 (寺西)

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動を続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、

①年10回、会報誌‘わんりい’を送付

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆ インターネット会員の制度もあります。メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しいカラー版‘わんりい’をお送りします。こちらは無料です。

◆ 町田国際交流センター(町田市民フォーラム4F)、町田生涯学習センター(109ビル6F)、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

‘わんりい’245号の主な目次

寺子屋・四字成語(24) 路不拾遺	2
論語断片(48)有耻且格	3
お爺さん三人の大連の旅(5)	4
新元号「令和」への思い	6
四姑娘山写真だより(45)女王谷の神々(3) 現代ボン教の最高神SPA・ギャルモ	8
「漢詩の会」(31) 劉禹錫の七言絶句	10
海外出張の思い出(ナイジェリア編④)	13
3度目のソウル近郊ハイキング	15
暗唱	17
サミラさんのイラスト館	20
‘わんりい’掲示板	別刷